

しの 児島虎次郎を偲ぶ絵画展

「児島虎次郎を偲ぶ絵画展」に、市内の小学校16校、中学校7校から1215点の出品がありました。児島賞入賞作品と渡辺賞、佳作の入賞者を紹介します(敬称略)。なお、入賞作品をはじめ296点を、2月2日(日)まで成羽美術館で展示しています(本展のみ観覧の場合は無料)。

■問い合わせ 成羽美術館 ☎(42)4455

児島賞(金賞)



「元気いっぱいYOSAKOIソーラン」
平田 さくら(落合小4年)



「秋が始まった方谷園」
吉田 和真(中井小6年)



「夏野菜」
渡辺 真帆(成羽中1年)



「わーい、トマトだ!」
葉廣 煌(有漢東小1年)



「きれいな花火」
甲平 千恵(成羽小2年)



「中井せんだん太こ」
荒木 颯斗(中井小3年)



「組体操初めての一気立ち成功だ!!」
大塚 扇音(落合小5年)

渡辺賞(銀賞)

三宅 陽輝(川上小1年)、榎並 由華(西山小2年)、家近 龍之介(川面小3年)、榎一葉(川上小4年)、羽澤 菜生(有漢東小5年)、藤井 皓太(川面小6年)、赤埴 玲実菜(備中中1年)、大福 綾夏(成羽中2年)、難波 ことみ(成羽中3年)



「ひまわり畑の人」
堀江 由佳(成羽中2年)



「門のある風景」
平松 史枝(備中中3年)

佳作

()は学校名

〔小学1年〕平松 嵩健(川上)、金高 良太(成羽)、花田 琴音(中井)、谷 美悠(松原) 〔小学2年〕仲岡 優大(川面)、辻 渚(西山)、青木 千歩(巨瀬)、道平 采幸(落合)、室 竜矢(落合)、瀧川 瑠希也(落合)、竹井 准(落合)、廣兼 和真(落合) 〔小学3年〕三宅 悠一郎(川上)、黒岩 愛唯(西山)、内藤 幸哉(中井)、花田 真大(中井)、岡村 大地(松原)、芳賀 智哉(富家)、西井 梨(落合) 〔小学4年〕平松 那菜(川上)、渡邊 歩乃佳(川上)、鈴木 誠弘(中井)、日名 和希(松原)、富弥 未沙(福地)、熊本 千夏(落合)、野口 舞(落合)、森本 洸(落合) 〔小学5年〕佐藤 弘樹(高梁)、和田 愛梨(中井)、荒木 大地(中井)、若森 脩弥(松原)、難波 光(巨瀬)、平松 元輝(巨瀬)、末藤 光貴(落合) 〔小学6年〕武田 泰河(川上)、藤井 玲穂(川上)、山根 優花(成羽)、伊達 恋楓(川面)、村上 智哉(川面)、秋山 開(高梁)、塩田 なつき(中井)、山下 直起(福地)、小林 竜也(落合)、東 陽花梨(松原) 〔中学1年〕吉田 那優(有漢)、黒川 佳津(高梁)、高木 玲南(成羽)、高見 莉奈(備中)、元石 恵理奈(川上) 〔中学2年〕森脇 理子(有漢)、赤木 沙菜(高梁)、木安 朱音(高梁)、本倉 佳世子(高梁)、芳賀 祥浩(備中)、宮本 朋実(備中) 〔中学3年〕増岡 修(有漢)、三村 桂子(高梁)、久山 亜美(高梁東)、山下 隼暉(成羽)、江草 なな子(備中)、折口 実穂(川上)、川上 姫奈(川上)

地名をめぐ

九十二

御前町

「御前町」は秋葉山(一六〇ト)の西麓に位置する町通りで、北は小高下谷川、南は頼久寺から美濃部坂を上った場所までの間にある南北に通る町筋で、江戸時代の松山城下町時代には、家中屋敷町の一つで「御前丁」と表記されていた。

当時の「御前丁」は、「水谷史」・「御家内之記」によると、元禄初年

頃(一六八八〜一七〇四)には、長さ二三間で家数一五軒、小高下谷川側に家数二三軒と記録されています。石川総慶時代「正徳元年(一七二一)〜延享元年(一七四四)」には、一軒及び一棟長屋二があったことが「松山城下絵図」・「松山家中屋敷覚」(市図書館)に記録されています。そして幕末には、知行五〇石〜一二〇石取の家中屋敷二三があった(「松山城下屋敷図」市図書館)ことが分かります。

この町の西側の角にある新撰組隊士となった谷三十郎・万太郎、昌武の生家で直心流の指南役だったといわれる父、谷三治郎の家が描かれています。また、谷川通りには、順正女学校の創立者の一人で福西志計子(志計)の生家、福西郡左衛門の家が、その隣には山田安五郎(方谷)の家と進昌一郎(鴻溪)の家が並んでいました(昔夢一班)。

山田方谷は、藩校有終館の学頭でしたが、天保七年(一八三六)この「御前丁」北側の小高下谷川沿いに屋敷を賜って、天保九年(一八三八)、自分の屋敷を使って家塾「牛麓舎」を開き、学頭となって漢学を教えています。塾生はいとも数十人いたといわれ、中でも

進昌一郎や三島中洲、そして越後の河井継之助などがここで学んでいます。嘉永二年(一八四九)、方谷が元締役兼吟味役となって藩政改革に全力を挙げた後、三島中洲が間、学頭を務めた後、三島中洲が塾長となっています。

町名の由来となっている御前神社は、以前小高下の泉が丘にあって、御前大明神といわれていました。元和七年(一六二二)初代藩主池田長幸が現在地に遷座したといわれ、幕末の天保一〇年(一八三九)の大火で焼失したので、弘化二年(一八四五)に板倉勝職が再建したといわれています。再び慶応二年(一八六六)、火災に遭ったため、現在の社殿は明治一四年(一八八二)に再建されたものです。仁治元年(一二四〇)、秋庭三郎重信が松山城に砦を築いて以来、松山城の鎮守として代々の城主の崇敬を受けた神社なのです。社伝には、「創建は宝龜六年(七七五)八月に吉備真備が唐から無事帰国できたことに対しての神恩に報い、徳に謝するために建立した」と伝えられています。

「御前神社」は備前・備中・備後に多く分布しているといわれ、それは古代吉備の国の領域だったと

考えられ、吉備の国の一宮だった、吉備津神社に祭られている丑寅御前(外陣の四隅に御前諸神が祭られ、「吉備国征服の伝説」による怨念を晴らす神(岡山県史)中世I)を勧請した神社で、「御前」は「ミサキ」とも読まれているのです。境内には水廻神社、御子神社など六つの末社が合祀されています。

また、参道登り口には、鐘撞堂が建っています。慶安四年(一六五二)に藩主水谷勝隆が城下の士庶に十二時を教えるため、矢掛の治工、高草彦之丞に建造させ建立したといわれています。朝六ツ時、暮六ツ時などを定め、報時鐘を鳴らしていました(昔夢一班)。鐘撞堂の南隣(美濃部坂を登ったところ)には、一棟長屋があったと、吉岡浅五郎・藤本又兵衛・木口庄助などの報時を担当していた武士の名が見られ(松山城下屋敷図)、誰でもできるものではなく、大変責任のある重職だったといわれています。

このように御前神社が地名の由来となった「御前町」は、松山城下時代には重要な武家町だったことが分かるのです。

(文・松前俊洋さん)



御前神社参道付近から北方向に御前町通りを見る。右上が鐘撞堂